

石井 忠<sup>1</sup>: 海からくる神と荷物  
 Tadashi ISHII<sup>1</sup>: Spirits and matters from the sea

福足神社は宗像市大字須恵字の野に鎮座する(図1)。大日本神祇會福岡支部(1944)にはこの神社の縁起を「御神に天降り給ふ時、神輿を須恵(すえる)し、在行所なり。依って後世村の名とす。土人小祠を立て、安芸国佐伯郡巖島の神を勧請す。中古より保食神、倉稻魂神、彦火々出見尊、豊玉姫神四柱の神を合祭し、福足の神社と号すと云。明治五年十一月三日村社に定められる。」と記している。

筑前国統風土記拾遺には「社説に、祉福を賜う神なれハ、福足の号有と云ふ。毎年六月十日ニ神事あり。比日ニ安芸より當社ニ来格し給へる由。全九日の夜、村民等遠賀郡初浦(波津)の磯に寄石とて大巖有。比巖の上ニ磯の石を抱き登て積置、是を神の荷物を上ると云、比事今ニ絶る事なし(略)」とある。

須恵出身の民俗学者古野清人は福足神社の事について次のように記している(古野 1970)。「一家から男子一人ずつ出て相連れて至る宮行事はふつう(奇石祭)とは言わないで(石かたげ)という。現在は7月13日の晩に赴き、14日に海に入って大石を荷物をかかえるように後ろ手に担いであがってくる。それから半里の海添いの道を歩き、小石がごろごろと鳴る高い波の音を聞きながら織幡様のある鐘崎の深浜でお塩いを取って帰る。藻と塩砂とをテボに入れて、帰ればお宮に供える。夜明け前の暗い海辺の道を辿っていると、樹林から何ともいえず香しい匂いが漂ってくる。(中略)この十五日は祇園様の日である。」

もう十年ほど前(1993年)、この祭礼を見たので、それを記してみたい。

7月14日午前4時過ぎに、遠賀郡岡垣町波津の「福足神社祭神御上陸霊地」に待っていた。ここは県道300号線沿いで、下は礫石海岸で大小さまざまな石よりなっている。海は響灘、海が荒れた時にはザーザーという石の摺り合う音がする。以前は各文献にも見られるように道路のそばに大きな岩が突き出るようにしてあり、そこに玉垣で囲い、海岸から運ばれた石が積み上げられ、中央に福足神社祭神御上陸霊地の碑がたっていたのだが、道路の拡張工事が行われ、今まで積み上げられた石は除かれてしまった。新しくなってはじめて石かたげが行われる。4時とはまだ真っ暗闇で、まだ白みはじめるような時間ではない。ただ、波音と、うすぼんやり、白波が見える程度である。4時40分ごろ波津側から車やバイクらしいライトが遠くから点滅、こちらの方に向かって来るのが見える。やがて御上陸霊地の前あたりに停まり、車の前や後でシャツを脱ぎ(フンドシは出発前につけていた)裸になり、フンドシ姿になって、草鞋をはいた、須恵の17名の一行達である。

碑の横に新しく海へ降りる階段ができていた。めいめいそこに降りていく(以前は自然に岩の道が海まで通じていた)。下の礫浜で最初に足に触れた石を、肩に担ぎあげたり、片手で運ぶ。「千両金箱、万両金箱」とも



図1. 福足神社所在地。



図2. 新しくなってはじめての石かたげ。



図3. 石をかたげて「千両金箱、万両金箱」を唱えて運ぶ。

いめい口に唱えて、階段をあがり(図2, 3), 御上陸霊地の碑まで運んでそこに置く。そして拍手, 一礼して石かたげの神事は終わる。

石かたげの神事が終わると、服とズボンを、来た時の服装に替えて、今度は玄海町(現宗像市)鐘崎へ汐井取りへ向かう。

再び車やバイクに乗って県道を通り、御上陸霊地から南、約3km, 玄海町鐘崎の織幡神社横の恵比須神社の先の空地に車を停めた。その付近に繁っているチガヤ(イネ科)をむしり取り、縄状に左あみになう。それを持って、今はコンクリートの護岸がされており、海に出られるところを選び、階段を降りる。海の周囲は大部分が波消ブロックが投入されているため、狭い範囲が礫浜となっている。そこに寄っている海藻(特定の海藻ではない)を拾い、輪にしたチガヤにはさんでくる。

再び車に乗り、須恵の福足神社へ戻った頃には、夜はすっかり明けて、陽光がのぼりはじめる。神社へ戻ると、参拝した後、神社の左より時計回りにまわり、本殿の裏をまわると、その横の桂化木類がある、一番大きな石の上に、チガヤと海藻を置いて礼拝し、再び拜殿で一拝して、本日のすべての神事が終了した。全員が一緒になって行うわけではなく、到着すると参拝し、海藻を置いてばらばらに帰っていくのである(図4)。

宗像市須恵の福足神社から出発して、遠賀郡岡垣町波津にある福足神社祭神御上陸霊地の下の浜で石かたげを行い、宗像市玄海・織幡神社下の海藻をとり、須恵へ戻る。距離にして約24kmである。昔は全行程を歩いたが、やがて馬車、自転車、車と変化をし、時間も大幅に短縮していった。

チガヤあみと海藻とりが、いつ頃から行われるようになったかは、はっきりしないが、海藻を砂に見たて、それを素手で持たずにチガヤにはさんで持つようになったのであろう。

服装については古くは裸で体には何もつけなかったり、一部赤ベコや白ベコをしていたようで、福足神社に掲げられている江戸末期と思われる石かたげの絵馬には、そのような姿が描かれている。時代と共に、シャツ、パンツ姿で、海へおる時には、はきものはズックとなった。しかし、私が見た1993年の石かたげでは、氏子の一人がサラシ木綿とわらじを全員に寄贈し、この時にヘコが実現した。13日夜には、宿泊所で、長老によるヘコカキの講習が行われている。

伝統や神事を守り、維持していくのは、なかなか容易ではない。須恵に、新しい転入者が入り、団地が出来ると、すべてが神社の氏子という具合にはいかないし、若い人達には、関心がほとんどない。これは、全国的共通の問題である。先祖から引き継いできた神事はいま細々と守っているのが現状である。

西の海からあがってくる神、神の荷物を運ぶ人達、そこには客人や稲作伝来の遠い記憶が残っているような気もする。



図4. 石の上に海藻をはさんだチガヤを置く。

#### 引用文献

- 大日本神祇會福岡県支部. 1944. 福岡県神社誌上・中巻. 330pp. 福岡県, 福岡.  
 古野清人. 農耕儀礼の研究. 筑前宗像における調査. 1970. 354pp. 東海大学出版会, 東京.  
 筑前国續風土記拾遺刊行会. 1973. 筑前国續風土記拾遺全五巻. 1911pp. 刊行会, 福岡.

<sup>1</sup> 古賀市立歴史資料館 〒811-3103 福岡県古賀市中央2丁目13番1号 <sup>4</sup>Koga City Historical Date Hall, 2-13-1, Chuou, Koga City, Fukuoka 811-3101, Japan